

今昔物語 第9話

土地の歴史を見守る  
「ワシントンヤシ」

川中新町にある住道駅前住宅の中に、一本のワシントンヤシが立っています。ワシントンヤシは、高さ20〜30メートル、幹周り60〜70センチにまで成長する樹木で、現在も天を目指してすくすく伸びています。

場所は、鐘紡住道工場の跡地で、当時六百本あまり植えられていたそうです。このヤシはそのうちの一本です。住宅の建設計画時に、住宅管理組合が、樹木を保存するため、ヤシの木を当時と同じ場所に残しました。

鐘紡住道工場は、明治28年10月に創立された摂河紡績株式会社（日清戦争後の軽工業の発展に伴い、河内木綿再興を目指しますが、外国綿に頼らざる



を得ず、資金難に陥る）の譲渡を受け、明治32年9月に開業しました。当工場の原綿はすべて外国産で、初期は寝屋川水運を利用して、角ノ堂浜（住道駅付近）に運び、水運・牛車で工場に運び込まれました。最盛期の工員数は昭和10年ごろの三千人でそのうち女子が二千五百人を占めていました。市の産業の中心として栄えた工場も、化学繊維に押され、昭和50年10月で操業を中止します。工場の栄枯盛衰の歴史を人知れず、静かにこのヤシは見守ってきました。

今昔物語 第10話

中垣内の庚申塔

中垣内2丁目、阪奈道路の西側に「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿、その下に鶏のつがいを彫った石柱がひっそりと建っています。地方では、近年まで「庚申待ち」とか「庚申講」などと呼んで、仲間が集まって酒食を共にし、「晩中よもやま話をして明かす習慣があったようです。現在では、娯楽にこと欠かないためか、庚申待ちで徹夜することはなくなりました。

定説とはいえませんが、この民間信仰の起源と考えられている中国の道教では、「人の体内には、日夜絶えずその人の行動を監視する3匹の虫がいて、60日に1回の庚申の夜には、人の眠っている間に体を抜け出し



て天帝にその人の悪事を報告する。天帝は人の罪の軽重により、命を短縮する」といわれています。罪深く生まれた人間は、長寿のため、虫が体内から抜け出せないように、鶏が鳴く朝まで眠らない、また3匹の虫よ「悪いことは何事も見ざる、聞かざる、言わざる」でとなしくしていかれと願いを込めた集會が、この中垣内地区でもおそらく江戸時代ごろを最盛期として、行われていたことを庚申塔が語っています。